
コクハクノアサレン

改樹考果

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コクハクノアサレン

【Nコード】

N5677F

【作者名】

改樹考果

【あらすじ】

「あなたが好きです」その告白は、誰の為に向けられたもの？好きな幼馴染の告白の練習に付き合う彼。その思いは報われるのか？

(前書き)

半日で考え、半日で仕上げたので、あまり見直しをしていない、勢いだけで作られた作品です。

ややお見苦しい所はあると思いますが、よろしければ見て頂けると幸いです。

彼

「あなたが好きです」

そう彼女から言われた時、自分の心拍数が一気に上がったのを感じた。

「あなたが好きです。大好きです!」

きつと顔が誰が見ても分かるぐらいに赤くなってるはずだ。

「私と……付き合ってください!」

……心臓が止まるかと思うほど、その言葉は衝撃的だった。

だから、なかなか声が出せず……何度も咳払いをして、

「つい、いいんじゃないか?そんな感じで『本番』も頑張れよ」

……そう、これは練習だ。

「ええ〜?これってベタ過ぎでしょ?」

今のに何が不満なのか、そんな事を言う彼女に、俺は極力平静を装いながら、

「告白にベタも何もないだろ?」

つとやってやると、彼女は小馬鹿にした様な顔になる。

「何言ってるの?告白にはね。TPOの他に、オリジナリティが必要なもんなのよ。ああ〜あ、駄目駄目ね。告白もした事も、された事がない奴は」

ちよつとカチンときたので……まあ、事実だが、

「……お前だってそうだろうが?」

つとやってやったら、また小馬鹿にした顔になって、

「された事はあるわよ」

……。

「しかも両手じゃ足りないほど」

……結構衝撃的な話だったが、

「へえ〜そうかい」

つと言っしかなかった。

「つむ？信じてないな」

「はいはい。凄いですね」

「むかあ〜」と言って何かを言おうとする彼女は、不意に壁時計に視線を向けて……「そろそろ行かないと遅刻しちゃうじゃん。」

行こ純一

そう言っつとつと俺の部屋から出て行く彼女の後姿に……俺は深い溜め息を吐いた。

……この分だと気付いていないんだろう。俺が、彼女の事を、

好きだ

っつて事を。

瀬野^{せの} 花は^{はな}、産まれた時からの腐れ縁……要は幼馴染だ。

子供の時から家族ぐるみの付き合いなので、ほとんど兄妹つと言っつてもいい感じではあつたんだけど……ある時、クラスの友人に彼女に告白するから紹介してくれつと頼まれ、紹介し……友人が振られたと聞いた時、俺は自分が酷くほつとしてる事に気付いて……自分が彼女の事を『家族』としてではなく、『異性』として『好き』だと言っ事に唐突に気付いた。

それに気付いた時、俺はかなり混乱した。

表面上は普通に過ごしてたと思うけど……当時の日記（俺には隠れて日記を書く趣味がある）には、その混乱ぶりが見事に書かれてる。

数十ページに渡つて、「好きだ」とか、「どうしよう」とか、そんな事ばかりびっちり書いてあつて……目も当てられず、その日記は本棚の辞書カバーの中に封印した。

もちろん、それに気付いた時、真つ先に、告白しようと思つた。

でも、もし、「ごめん。私、純一の事、男として見れない」とか、

「あははは。何、今日はエイプリルフルだっけ？」とか、言われたりしたら……どうしよう？って考えが浮かんで……するに出来な

い。
それに、俺が告白する事で、今の関係が崩れる事が……怖かった。
ずっと一緒にいる彼女が……いない状態を……俺は……考えたく
ない。

それぐらい。俺は彼女が好きだった。好き過ぎた。

だから、なかなか告白出来ず……ある時、

「純一。私ね。好きな人が出来たの。だから、告白したいんだけど……なんか恥ずかしくて……だから、練習相手になってくれない？」

そう言われた。

頭が真っ白になった。

それはつまり、彼女はやっぱり自分の事を異性として見てない事になり……そして、その告白が成功すれば、彼女は……言い方が悪いけど、その男のものになる。

嫌だった……でも、今の関係を壊したくないから……つい、

「いいよ」

つと言ってしまった。

つで、その日から毎朝、告白の朝練に付き合わされているというわけだ。

「好き。好き。好き。好き！」

「連呼は……どうだろうなあ？」

「確かに、オリジナリテイが無さ過ぎね」

「ス・キ・デ・ス」

「ふざけてんのか？」

どこその宇宙人みたいな口調の告白に、ジト目で彼女を見る。

「オリジナリテイくない？」

「逆じゃない」

「好きでちゅー」

「とうとう頭がいかれたか？」

「面白くない？」

「面白さを求めてどうする？」

「貴様が気に入った！私の男になれ！」

「男気があるな……」

「どうだ、この野郎」

「うるせえ、馬鹿野郎」

「ずっとあなたの事が好きでした」

「オーソドックスだな急に」

「回り回って……」

「……お前な……」

「きっとあなたは好きになるう。きっとあなたは私を好きになるう」

「催眠術？」

「私の隠れた才能が」

「目覚めるかボケ！」

毎日毎日、変な告白から、普通の告白まで、色々な告白の練習台にされる俺。

練習とは言え……俺に向けられた告白じゃないとは、分かってはいても、その度に胸が高鳴る。

……このまま……このまま、彼女に告白させていんだろうか？
そんな考えが……ふっと浮かんだ。

連日聞く彼女の告白に、つい勘違いと分かっているながら、勘違いしてしまう。

もしかしたら、今、告白すれば……彼女は……。

ありえない事を考え、願ってしまっ。

……そう言えば、彼女の好きな男を誰か……聞いていないな。

「今日告白しようと思うの」

それを聞いた時……身体が固まった。

「帰ったら、結果を報告するね」

「……ああ」

止めるべきだと、俺の心は言う。

……でも、止めた所で……どうなる？

やや不安そうな顔をした彼女が、俺の部屋を出て行く。

その後姿を、俺は唇を噛み締めて見詰めるしかなかった。

結果を聞きたくなかった。

だから俺は、なかなか家に帰れなかった。

ふらふらと落ち着きなく家の近所を歩いては……ため息を吐く。

日が沈み、街灯が付き……お腹が鳴った。

……流石に……もういないだろう。

そう思って家に帰ると……玄関に彼女の靴があった。

恐る恐る部屋に入ると……彼女は俺に背を向けて立っていた。

「純……」

俺の存在に気付いた彼女は、ゆっくりと振り返り……その頬に、涙を流していた。

その涙が全てを語っている……振られたんだ。

そう思った時、俺は……嬉しかった。

そして、自分を恥じた。

彼女が辛い思いをしているのに……その事で喜ぶなんて……最低だ。

そう思った時、不意に彼女が抱き付いてきて、顔を俺の胸に埋めた。

涙が服を濡らす。

「私の告白の何がいけなかったのかな？」

「いけないことなんてあるか」

「私の思いが伝わらなかつたのかな？」

「伝わらない事なんてないさ」

「何を言ってるんだ俺は？」

彼女の言葉に、俺は反射的に言葉を返してしまう。

こう言う場合、俺の役割は、ただ、黙って聞くだけだって、分かっているのに……。

「純一……私、駄目なのかな？」

「駄目なんてことあるか」

「だって、好きな人に、好きって言われたいんだよ？……あんなに告白したのに」

段々、腹が立ってきた。

こんなに彼女に思われているのに……なんでそいつは答えないんだ！？

「……ごめんね純一」

すつと、俺の胸から顔を離す彼女。

その顔は、今まで見たどの彼女よりも弱弱しくて……

俺は衝動的に、

「純一？」

抱き付いてしまった。

「……やっちまった！？っど……どっしりっ……」

「痛いよ純一」

強く抱き過ぎた……ええい！もう！どうにでもなれ！！

「好きだ。は」

「うん。私も」

……………？

好きだ。花。俺と付き合ってくれ！っと言おうとして……………途中で花に遮られた。

ウン。ワタシモ？

……………？

「あー！ごめん」

呆けた俺の腕の中から、がばっと離れ、

「告白途中で遮っちゃったね。あはは。つい、嬉しくて、言っちゃった。はい。続きどうぞ」

っと言って、ニコニコ。

さっきの涙顔が……………どこにいった？

「……………いや、続きどうぞって……………」

「もう！いいから！っ・づ・き」

ニコニコしたかと思ったら、今度はむくれ顔……………仕方がないの
で、

「えっと……………好きだ。花。付き合ってくれ」

「感情がこもってない！もっと情熱的に！」

……………いや、そんな事言われても……………一体、

「どっ言っ事？」

その俺の問いに、花はふっふっふっつふつと言いながら、スカートのポケットから……………目薬を取り出した。

「まんまと引っ掛かったな純一君！」

「やかましい！」

とりあえず、頭を叩いとく。

彼女

「私はね。告白するより、告白される女なわけ」

「へえ〜そう」

「っむ！何その生返事」

「……………がんばれ」

「むかあ〜。絶対告白させて見せるからね！」

「誰から？」

「知らない！」

きつと彼は覚えていないだろうけど………そんなやりとりを、昔した事がある。

だから、昔から好きだけど、絶対、私から告白なんてしてあげない。

「花の幼馴染ってさ。ちょっと暗いけど、顔は良いよね」

その友人の言葉に、ドキっとした。

「あいつなんて、駄目駄目だった」

「………何？好きなの？」

「っそ、そんなわけないじゃん。只の幼馴染よ。只の」

「あやしい〜」

ちょっと不味いかも。

幼馴染の立場ってだけで、油断してた。

惚れている私が思うのもなんだけど、彼は決してモテるタイプじゃない。

だから、私以外に好きになる人なんて………とか思ってたんだけど………年を追う毎に、見た目だけだんだん良くなっていて事なのかな？………考えて見れば、毎朝毎朝、私がチエックしているのが………いけなかったんだあ〜しまったあ〜どうしようお〜実行あるのみい〜。

とか思いながら、私は彼の部屋に来ていた。

勝手知ったる彼の家。

彼がいなくても、彼のお母さんに顔パスで入れてくれるのは、幼馴染の特権。っと。

などと思いながら、彼の部屋を物色中の私。

昔、彼から告白させてやろうと決意した日から、私は時々、彼の

部屋に来ては、彼が密かに書いてある日記を密かに読んでいた。

彼はその事を秘密にしているみたいだけど……バレバレ。

つと言っても、その日記を見つけたのは、ほとんど偶然見たいなもので……ちよつと彼が、Hっちい本を持つてるのか疑問に（あまりにもアピールしているに、告白してこないから女性に興味無いんじゃないかって）思つて、家探ししている時に見付けた。……勿論、バツチリHっちい本の隠し場所も見付けてたり……うん。許容範囲内の趣味だった。

そんな事より……今日は何を書いてあるかなあ。

ちよつとワクワクしながら、日記を見ると……

『今日、友人の頼みで、幼馴染に友人を紹介した』

……ああ！そう言えば、ちよつと前にそんな事があつたかな？即断つたけど。

『だが、直に振られたらしい』

あつたり前でしょ！私はあなたが好きなんだから！！ぶんぶん。なんちゃ……て？

次の文章を見て、私は、驚きで止まってしまった。

『ほつとした。友人が振られたと言うのに……』

……えつと？……え！？

慌てて続きを読む。

『今まで、幼馴染……花の事を姉か妹にしか見ていなかったけど……それは勘違いだった。今日、もしかして、友人に彼女が取られるかもしれないと思つている事に……彼女が家族としてではなく、

異性として好きだと言う事に……気付いた』

……やった！やった！やったあ〜！！ついに、ついにい〜、彼を私に惚れさせる事……惚れさせる？……ずっと好きだったって事だから、気付かせる事に？……まあ、いいや、成功したあ〜……長かったなあ〜。

私はニコニコで顔で、続きを読み、そこに書かれている事に、今度は違う意味で硬直した。

『でも、今さら告白なんてしてもいいんだろうか？……生まれた時からの、家族ぐるみの、幼馴染。そんな彼女は……俺を男として見ているんだろうか？』

見てるって。大好きだって。告白してもいいんだって。

『告白して……振られるイメージしかわかない』

振らないって。

『最悪、告白する事で、今の関係が崩れてしまう可能性が……』

そんな事絶対にないって。

『そんな風になるんだったら……』

……純一。

……どっしよっ？このままじゃ告白してくれない……私から告白しちゃおうかな……って、出来るかあ〜……ん？

彼の今に始まった事じゃない弱気に、悩んでいると、次の日の日記が飛んでも無い事になってる事に気付いた。

もつびつちりと、『花好きだ』とか、『どうしよう?』とか、書かれていた。

……この日記には、たまにこういうページがある。

どうも彼は、ストレスが強くなると、ストレスの原因をこつやっページいっぱい書く事で、ストレス解消しているみたい。

いつもの事だけど……ん……これって、こつちから押せば

……押すだけじゃ駄目かな? 彼、結構優柔不断な所があるから……特に、今回みたいな事は……いい事思い付いた!

押すだけじゃ駄目なら、引いてみよう!

名付けて『早く告白しないと……別の人に告白しちゃうぞ? 作戦』

……ネーミングセンスゼロね。私。

次の日。

作戦さつそく決行。

「純一。私ね。好きな人が出来たの。だから、告白したいんだけど……なんか恥ずかしくて……だから、練習相手になってくれない?」

つと、思いつめた感じで、言ってやった。

明らかにシヨックを受けた顔の彼は、ちよつと間を置いて、

「いいよ」

つと答えた。

……もう。好きな人つてのは、あなたの事よ……気付け馬鹿。

その日から、私は毎朝毎朝、彼に練習と称しては告白した。

勿論、彼に対して、時には真面目に、時にはふざけて、何度も何度も、心を彼に向けて。

なのに、気付きやしやがらない。

まあ、でも、気付かれても困るかな?……だって、これで気付かれたら、私の告白が『成立しちゃう』。私の目的は、あくまで、『彼から告白させ、私が了承する』事。

そう、それまでは、私の告白は、『本気だけど、本当に練習』。

最初の頃は、私が告白する度に顔を赤くしたり、青くしたりして
た朝の告白練習だけど………ちょっとふざけ過ぎたせいか、いまい
ち反応が悪くなってきた。

だから、次の段階、

「今日告白しようと思うの」

そう私が行った時、彼の身体が硬直するのがはっきり分かった。
ふふっふ。動揺してる動揺してる。……じゃあ、更に駄目押し。

「帰ったら、結果を報告するね」

「……ああ」

顔が引きつってるよ純一

いけないいけない。いよいよの告白の前に不安そうな顔の演技をし
てるって言うのに、つい笑っちゃう所だった。

………遅い！

いよいよ作戦も佳境だって言うのに、当の本人が、なかなか帰っ
てこない。

………あの男おゝさては自分の嫌な結果を聞きたくなくて、
私が帰るのを待ってるなあゝ………もう、仕方がないなあゝ………あん
まり遅くなると………お互いの両親に作戦を放さなくちゃいけないじ
やない

昔からの友人同士である私と彼の両親は、多分、ずっと前から二
人がくっ付けばいいなって、企んでたんだと思う。彼は気付いてな
かったかもしれないけど、私にはバレバレ。別に、気付いた時には、
彼の事が好きだったからいいんだけどね。

作戦を互いの両親に教えると………勿論、大賛成。

帰ってくるまで、彼の部屋に居ていい事になった。

うちの両親なんか、朝帰りでもOKよつか言い出す始末で………

普通、そんな事言う親っているのかな？……つま、いつか
どきどきしながら彼の部屋で待つ私。

立ったり座ったり、彼の秘蔵のHっちい本を見たり……なんか、
この間見た時より幅が広がってるような……つま！どうしましょ？

「ただいまあゝ」

玄関の方から彼の声がした。

っど！どうしよう！？Hっちい本なんか見ている所を見られたら、
これまでの作戦があゝ！！！！

私は慌てて本棚にHっちい本を押し込んで、部屋のドアに背を向
け、ポケットに入れてた目薬を両目にたっぷり注して、こぼれない
様に天井を見上げる。

彼の足跡が段々近づいてくる。

そして、部屋の扉が開く。

今！

顔を正面に戻して……

「純一……」

振り返る。

悲しげな表情も忘れずに……彼は、私の目薬に、驚き、一瞬だ
け喜んで、暗くなった。

彼が何を思ったか手に取る様に分かる。

もう一引き押し。

彼に抱き付き、彼の胸に顔を埋めた。

瞳にまだ残っていた目薬が、彼の服を濡らす。

「私の告白の何がいけなかったのかな？」

ちよつと本心を混ぜて、

「いけないことなんてあるか」

そうなの？

「私の思いが伝わらなかったのかな？」

この鈍感！

「伝わらない事なんてないさ」

……あゝ告白の途中だったのにいゝやっちゃったあゝ
私の告白返しに、混乱して固まる彼。

……あははあは、

「あ！ごめん」

恥ずかしさのあまり、抱き付いている力が弱くなった彼から離れ、
「告白途中で遮っちゃったね。あはは。つい、嬉しくて、言っちゃ
った。はい。続きどうぞ」

より困惑した表情になる彼。

「……いや、続きどうぞって……」

困惑し過ぎ！！

「もう！いいから！つ・づ・き」

私に急かされて、仕方なさそうに、

「えっと……好きだ。花。付き合ってくれ」

心のこもってない告白の続きを言った。

もう！

「感情がこもってない！もっと情熱的に！」

なんだか妙な沈黙の後、

「どう言う事？」

つと、彼が聞いて来たの……ネタばらしと行くのかな？

ふっふっふつと私は笑いながら、ポケットから目薬を取り出し、

「まんまと引っ掛かったな純一君！」

つて言ったら、

「やかましい！」

つて叩かれた。

彼

恥ずかしかった。

あつたまきていた。

嬉しかった。

……もつぐちゃぐちゃだった。

「つと言つわけなの。ごめんね。勝手に日記見ている」
花の弁解を聞いて、俺は……何も言えなかった。

……まさか、日記が見られているとは……って事は……ああ
ああああ！……勘弁してくれ。

頭を抱えて蹲る俺に、花は、

「その……だって……純一の日記って、面白いんだもん」
とか言いやがった。

「……どこが？」

うらめがましい俺の目線に、

「えっと、うんとね」

とか言いながら、俺が日記を隠している辞書のカバーを本棚から取り出そうと……ん？

妙なものが、視界に入った。

どこかで見た事がある……ぐしゃっとなった表紙の一部が、本棚の一部から飛び出している。

あんなの俺の本棚にあったかな？

俺の視線に気付いた花が、慌ててその本をぱつと取り、背中に隠した。

その一瞬に見えたその本は……。
サーっと血の気が引く感じがした。

「お！お！お前え！！なんでそれを！？」

「ふっふっふ。まだまだ甘いね純一君」

「甘いじゃねえ！つか、返せえ」

「やだよお」

取り返そうとする俺から、ひらっと逃げる花。

「甘い！」

「つきや！」

逃げた方向に手を伸ばすと、花がそれに驚いて、バランスを崩し、伸ばした手を掴み、ベットへと一緒に倒れ込んでしまった。

花が下に、俺が上に……………覆い被さる形になってしまった。
「っわ、わるい」

慌てて退こうとした俺の両腕を花が掴み。

互いに顔を見合って、沈黙。

「私達、幼馴染から、恋人同士になったんだよね？」

その花の問いに、俺の心臓が高鳴るのを感じた。

これって……………。

「幼馴染で……………恋人だよ」

その俺の答えに、花はちよつと泣きそふな顔で

「うん」

嬉しそふに微笑んだ。

再びの沈黙の後……………自然と俺は花に顔を近付け、

キスをした。

長い様で、短いキスをし、ゆっくりと花の唇から自分の唇を離した。

「ファーストキスだよね？」

「当然」

「私も」

「……………どんな味がした？」

「えへへ。キスされる事でいっばいで、分かんなかった」

「俺も」

「じゃあ……………セカンドキス……………今しちゃう？」

「……………今度は長めにしようか」

「……………う…ん？」

「ん？」

セカンドキスをする直前で、花が何かに気づき、視線を俺から外した。

釣られて花の視線の先を追うと……………うちの両親が、俺の部屋の

ドアを僅かに開けで覗いていた。

目が合うと、

「ごゆっくりい〜」

とか言っつて、ドアが閉められた。

.....

「あ〜.....はあ.....明日にしよっつか?」

「うん」

『コクハクノアサレン』終了

(後書き)

冒頭の告白ありきで考え始めた話です。

恋愛ものは好きですが、実際に書くのは初めてでしたので……
どうでした？

面白いと感じてくれたのなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5677f/>

コクハクノアサレン

2010年10月13日02時45分発行